

榛木翁年譜考証

岩 田 隆

人文社会教室

(1978年9月9日受理)

A Study of the Biography of Harinoki-Oh

Takashi IWATA

Department of Humanities

(Received September 9, 1978)

The objective of this paper is to present a detailed biographical study of Tanaka Michimaro in his later eight years (1777-1784), when he was in intimate academic contacts with his teacher Motoori Norinaga. The study is entirely based on reliable historical materials and the author comments upon the text as occasion demands, expecting this paper to be a useful step towards the further development of the study of Tanaka Michimaro and Motoori Norinaga.

まえがき

本稿は、田中道麿(1724-1784)の伝記のうち、特に彼の師であった本居宣長(1730-1801)と親しく学問的交渉を有った彼の晩年、死没に至るまでの八年間(安永六年-天明四年)について、管見の及ぶ範囲での資料に基づいて、その閏歴を辿ったものである。

題して「榛木翁年譜考証」としたのは、既発表の拙稿「田中道麿年譜稿」(名古屋工業大学学報, 29)との紛れを避けたためで他意はないが、道麿晩年の年譜としては相応しいかとも思う。因みに、「榛木翁」について、道麿自らは「はりのきのをぢ」と称し、人々は彼に対して「はりのきのおきな」と呼んだらしい。本稿の標題は、やや改まってローマ字の如く「はりのきおう」と読むを、よしとする。榛木すなわち彼の出生の地名に基づく。

なお、資料として用いた若干について、聊か蕪雑な考察を加えたゆえをもって、と言うよりも、何時の日にかは正確な「道麿年譜」を、という希いをこめた意味において、「考証」の二字を添えたことを許されたい。

榛木翁年譜

○安永六年丁酉(1777), 五十四歳。

二月九日 『武加志奴昆』¹⁾の序を万葉仮名で草す。

四月九日 歌会、兼題「時鳥」二首。

※暮雨(大平云²⁾, 人ノ名トキコユ)の東にゆくに、

吾背子は東にいます年をへて帰りこん日をつとかまたん

道のくに君ゆかませは宮城のゝ萩折持ぎ我にしめさね

※鳥居うしの東より帰り玉へるに、

東なるかとり³⁾の海の白珠を拾ひもたりしままひこあかせ

※「うなひぬし」「堀田氏」の名見ゆ。

七月 朔日 歌会。七夕歌二首。

十八日 道麿名古屋出立、松坂に向う。

廿日 朝、松坂着、直ちに鈴屋を訪れ、宣長に初めて対面す。宣長に奉呈の長歌(反歌一首を含む)あり。この折、宣長「山辺五十師原之考」を示す、道麿それを披見し読後感を二首の歌に詠む。

この時、荒木田尚賢同席せるものの如し。

宣長の手控「来訪諸子姓名住国并聞名諸子」

(全集二十, p. 245)に、「美濃多芸郡榛木村 田中庄兵衛 道万呂」と記し、その右肩に小字で「酉七月廿日」、また榛木村の右側

に「俗作飯」、同左側に「ハンノキ養老滝ノ辺」と注記す。

廿五日 嶺松院歌会に出席し、鈴屋社中の人々と交歓す。「阿倍仲麿」「別恋」「花手向」その他の詠歌あり。

※道麿はこの松坂訪問を契機として、以後宣長の提掇を受けることになったり。

九月十日 歌会。

廿五日 道麿、門人鳥井、坂本等と打ちつれて、川名に遊び歌詠む。〔謝庵と関係なきか〕

※以上主として「道全集」の記載による。

十一月五日 万葉集卷十二、十五、十七、十八について宣長に質疑す。〔経亮本卷四の尾に、「十二、十五、十七、十八、ノ四冊ヲ十一月五日ニ出ス」(大久保正氏著『本居宣長の万葉学』p. 71)とある。〕

十二月十日 万葉集卷十四を質疑す。〔経亮本卷四の尾に、「十四ヲ十二月ノ十日出ス」(前掲書、p. 71)とある。〕

※道麿は松坂から帰って程なく、宣長に万葉の質疑を開始した。卷一、卷二は真淵の万葉考が刊行されていたので、質疑は卷三から始めたと思われるが、その詳細(巻序、日時等)はよく分らない。しかし、経亮本卷四の末尾に上掲のメモが記されている点や、卷三の歌(262)につき、「かの時嶺松院にて御沙汰の候ひしか、云々」という筆致などから、尠くとも卷三、卷四は八・九・十月の間と推測せられる。

なお、この期の問件が後年沢真風によって、三冊に編成せられ『万葉問聞抄』の名で流布することになったことは言うまでもない。

○安永七年戊戌(1778)、五十五歳。

正月四日 師大菅中養父没⁵⁾、行年六十九、道麿に長ずること十四。

二月中旬 万葉十三質疑す。〔経亮本に「万葉十三問件、戊二月中旬」(上掲書 p. 70)とある。〕

三十日 宣長草稿本『待異論』(安永六年十二月以前成稿)を浄書して『馭戎概言』成稿。〔自筆稿本の奥に「安永七年戊戌二月晦日 宣長(花押)」と識す。〕

三月五日 万葉十四問件上・下⁶⁾、松坂から道麿の手に帰す。〔同冊巻首に「戊三月五日ニ反ル」とある。なお、問聞抄以外の質疑は、全集六の呼称「万葉集問答」に従う。すなわち本冊は

「問答一」と略称する。以下同じ。〕

※本冊には、小林義兄からの聞書として、義兄が江戸の諸鳥宅で綾足の妻キツに会った時の逸話を伝えている。当時の江戸での万葉盛行がうかがわれる。

四月 道麿の『勝不勝等考』成る。道麿これを宣長に贈りしものらしく「鈴屋之印」ありと。参考：『万葉集事典』p. 760, 『本居宣長の万葉学』p. 236-7。〔卷七問件(問聞抄上)に、「佐保河爾ムレキル千鳥ヨクタチテ汝ガ声キケバ宿不難爾(1124)、この卒句、問奉らまくほりすれと、此歌は、不勝、勝、難、紛々として諸巻にある詞なれば、今少し苦しみて後に問奉らんとて、此度は問まつらぬ也、(全集六、p. 249)」とある。〕

三月中旬 万葉九質疑す。〔経亮本に「万葉第九問件 下(上乎) 戊三月中旬」とあり。(上掲書 p. 69)〕

六月十五日 「問答二」。〔本冊は、卷十二問件、卷十三問件(何れも問聞抄中)と密接な関係を有している。道麿この頃契沖の川社を見る。門人も丸、ユキの名あり。〕

※本冊以前の質疑の大半が道麿から義兄に贈られ『問聞抄』となった。ただし問聞抄上の末に取める「追問」は、安永八年以降に交わされたものである?。

閏七月九日 「問答三」。〔本冊中に、長谷川常雄、松根、ユキの名あり。〕

八月廿六日 道麿宣長に出状(現存せず)。〔九月十二日の宣長書簡に「八月廿六日之御状相達し、拝見仕候」とある。〕

下旬 「問答四」。〔本冊中に、「トホゾマ云々、長歌の末、今モ見如、此詞聞取がたく、去年七月被仰聞候事ありし、道丸思ふに、云々」(全集六、p. 374)とあり、安永六年の松坂初訪問のさまが想見できる。〕

九月十二日 道麿宛宣長書簡(『本居宣長翁書簡集』所収)。古事記伝二冊返戻受取る。記伝第二第六二冊道麿に借す。道麿万葉について疑問漸く多くなる。鈴屋万葉会にての万葉釈義一件について報じ、道麿の意見を徴す。

※〔本書簡は、従来某年とされていたが、宣長の日記に、「安永七年五月廿四日、今夕万葉第六巻会読終。同年十月十四日、今夕万葉第七巻会読終。」とあり、本書簡中の記事に、「近頃此方万葉会にて、存付候一件、左ニ相記し、入御覽候、七ノ巻廿六丁ウラ、云々」

とあり、両者符合す。且つまた、道麿の万葉研究の進展のこともあれば、本書簡の年次は安永七年と推定してよいと思われる。]

※道麿が万葉質疑と共に、記伝をも借覧している事実は注意せられる。

十月中旬 「問答五」。本冊中に、大阪の高庄次郎香実とケンカ堂の名あり。又巻三、奥山之云々の歌(299)の結句「行年」について種々考察し、「目をすり赤め、額をなでて考えへど不得、只此上先生の御考もやと、奉待のみ、」と問うに対して、宣長が「此事、此方ニテモ近ゴロ段々吟味セシ事也、(中略)トマレカクマレ、ソネニハ疑ヒナシ、己レ近キコロテニヲハノ書ヲ著ス、其中ニモ此事論シオク也」と答えている。道麿の研学と玉の緒の執筆状況を示すものとして興味深い。

十二月下旬 「問答六」。

同 「諸巻問件」(全集十四所収)。本冊中に「去年(安永六)七月、道丸初テ参上仕レル時、事にふれて物語り仕りし四十七言の歌の事、云々」の記事がある。また道麿社中のエユキの説を報じたのに対して、宣長が「右ノ説甚奇説也、珍重々々、云々」と賛意を表している。

※道全集を見ると、「田夫世集、同〔安永〕七年戊戌」の箇所は、例えば「浦島之児」「浦島之親」「真間娘子」「耀歌」「葦屋処女」「松浦佐用姫」「五十師原」「防人」「桜児」その他東歌の国名など、万葉に題を求めた歌を数多く詠んでいることが注意せられる。正に万葉に明暮れた年であったと言える。

○安永八年己亥(1779)、五十六歳。

三月下旬 「問答七」。本冊冒頭に、「○伝十ノ五丁、トホトホシの御注に、この詞中昔の書にも見えず云々、道丸曰、源氏あげまき湖月抄ノ四丁オ、トホトホシクと云有」というに対して、宣長が「可引珍重々々、但シコレハウトウトシキ意也」と答えている⁹⁾。道麿の学が源氏にも博く及んでいたことの一証となろう。道麿「おちくぼ物語」の校合のため宣長本の借用を求めている。稻掛茂穂、本丸、マツネ等の人名、古言梯、字音カナツカヒ等の書名が見られる。

六月中旬 「後撰集疑問」(全集別巻二所収)。本冊末に、両者の「がり」についての考察が見られる。

[参考：『鈴屋答問録』]。

廿一日 門人鳥井あま彦江戸下向、別れの歌よむ。
廿三日 内山真竜初めて名古屋に道麿を訪う。この時真竜は真淵直伝の秘説「斎明紀童謡解」を道麿に伝う。両者の親密な交友関係は、道麿の没するまで渝ることがなかった。また未見の栗田土満に歌を託す。〔十月廿七日の項参照〕。

七月朔日 歌会。「七夕」の歌よむ。

八月中旬 「問答八」。本冊中に「春べ」の釈義あり。[参考：『鈴屋答問録』⁹⁾]。また、本丸の試みた思艸について図を描いて報じているのに対して、宣長は「珍説承り、此方ヘモ記シオキ申候、」と記している。これは後年『玉勝間十三の巻』の巻頭に、その後の経緯と合わせて紹介せられている。

十月廿七日 真竜宛道麿書簡(「内山真竜翁宛書簡集」所収。以下真竜宛道麿書簡はすべて本書によるものである。)。本書簡冒頭に、「誠に当夏は御立寄被下候処独身不自由一向庵末之義失礼仕候」とあるのは、六月廿三日の来訪である。道麿『万葉集選要抄』を読み、それについての批評を寄せている。同書は「安永八年亥孟春」の刊記があり、さすれば道麿は最新刊の書をすでに読んでいたわけである。他に、道麿所持本『新撰字鏡』のこと、淡斎先生の『風土記抜書』借用方依頼、松坂とは暫く文通なきこと、本書簡は社中の者秋葉参指に託す由などが主な内容である。

十一月五日 宣長の『万葉集玉の小琴』稿成る。(本書自筆稿本序文に「安永八年己亥十一月五日」と識す。全集六所収)。宣長がこの期に本書の稿を成したについて、間接ながら道麿との交流が作用しているのではないか。

十八日 伊勢屋忠兵衛のため歌よむ。

十二月六日 宣長「言葉の玉のをの序」に「安永八年十二月六日 本居宣長」と識す。道麿が本書に跋を寄せているが、この跋文の草された時期は不明である。

中旬 「問答九」。本冊中に、「己レ、源氏ノ玉ノ小櫛ト云物ヲ書始メツ、帯木巻チカキホトニ終ラントス、終ラハ見セ奉ラン、ソレニ云リ、」という注目すべき記事がある。宣長には既成(先月)の万葉小琴に対応するような形での源氏小櫛を考えていたのではあるまいか。

廿日過 安永九年二月朔日付真竜宛道麿書簡の中に、「去拾月、途中より御あつらへの御状、早速

相届忝拜見、其御状ニ風土記飛脚へ御出し被下候由なるに、届キ不申驚居候処、下旬に相成廿日過比ニ、十二月朔日出御状と共に、風土記も隨に相届キ、忝御状も隨に拜見仕候、云々」とある。

○安永九年庚子（1780）、五十七歳。

- 正月八日 道磨名古屋を出立、松坂に赴き十数日逗留、親しく宣長に問学す。
- 十五日 茂穂家会に出席するか。『望月集三』に「朝鶯」の歌一首、「美濃国人 田中氏」と注して載す。
- 十七日 遍照寺会に出席、鈴屋社中の人々と交歓す。『遍照寺月次歌集第五帖』に「谷鶯」の題で一首を録してある。
- ※この松坂行において、道磨は正式に宣長に入門したと考えられる。なお、この時道磨は月末頃まで松坂に止った。
- 二月朔日 真竜宛書簡。本書簡末に、「正月八日ニなごや出立、松坂へ参り十余日逗留、足下よりも久々御便なく、如何ヤト本居先生も被仰候、扱松坂にてつゞり候長歌並につねの歌一二首別入御覧候、云々」とあり、また冒頭にも「早春松坂へ参り、下旬ノ末に帰国、云々」とある。本書簡は極めて長文のもので、道磨の学問を考える上で貴重であるが、ここでは、その一二について紹介しておく。
- ※源氏物語観について、「おのれ道丸は、そもさのみ其事委ク存知たるにハあらねど、今ハ只ダ御心安ク奉存、思ふさまを猥に答まつる也、抑源氏五十四帖ニ現に書出したる人々は、天子も大臣も源氏も其外も皆作り物也けり、浄るり文又かぶき芝居のしうちも多ク作りたる事ながら、是らは例へば義経弁慶などと昔誠ニありし事をいひて、其ありし人の事ニ付ての行跡を、面白くいつはり作レル也、源氏物語などは、全くなかりし人をあらたにまうけて、事物ともに作りたる也、作りたれども、禁中のありさま、又人々の行儀、男女のつきあひ、装束の定マリ、宮中の事等迄、違はぬやうに書おせたりときこゆ、されば浄るりは誠より出ていつはりにおち、物語はいつはりより出て実事ニおつるに似たり、」と述べている。面白い見方だと思ふ。
- ※「てにをは」については、「凡テ神代より今ニ及て、てにをはハ違ル事なし、たまたま玉葉

集風雅集に違へる物見ゆるハ、誤りて違へル也、」とか、「右てにをは一件、筆談ニつくすべきあらず、只常ニ古今集万葉集をよく見て、其様をさと給ふべき也、」など、宣長のてにをは観の新鮮で決定的な影響が見られる。

- 二月下旬 「問答十」。本冊中に、「先比御地にありて、玉の緒を拜見、云々」とか、「此春、松坂より帰りて後は、誠に誠に其事〔稿者注一てにをはヲサス〕しれる道丸と生れ替りたり、」と、宣長語学の精髓を会得した感動が感じられる。因みに、後半は見出しも「比毛加賀美」となっている。
- 三月上旬 「問答十一」。墨付三枚の小冊である。
- 四月上旬 「問答十二」。本冊末に、「○古事記伝五ノ廿丁ウ、悔哉（クヤンキカモ）、不速来（トクキマサデ）と点し玉へり、こは、はやくのときにし玉へる点ゆゑならん、とくきまさずてと訓べきならずや、問奉ル、」に対して、宣長は「（前略）今カク示シタマヘルハ、実ニ己ガ心ニ符合シタリ、ズテト改ムベキ也¹⁰、云々」と賛意を表している。
- 同月 ※市川鶴鳴の『まがのひれ』稿成り、道磨の元に齎らさる。〔九月六日付書簡中に、「尚々、マガノヒレ、おのれ手へ来り候は、いにし四月の事、其節松坂へ入御覧くれ候へと、多門より手紙そへ来り候へ共、書中何とか大先生のみ心にもさはるへき事もやとたゆたひて、今日に及び参らせ候、」とある。〕
- 九月六日 宣長宛道磨書簡。「鈴門諸子の書簡一」（本居宣長記念館蔵）所収。内容は、蜻蛉日記一二校合、松平氏尾張志のこと、書林いせや忠兵衛¹¹、市川多門、安藤玄中等のこと。疑問二冊受取る。今回は疑問提出せず。借用方願う書目、ノト考上、カゲロウ三ヨリ下、玉ノヲゴト四ヨリ下、シブンエウレイ¹²、玉ノヲグン、源氏系図、詞ノ玉ノヲ。〔玉ノヲゴト四ヨリ下、は注意せられる。〕
- ※最も重要なことは、本書簡と同時に、市川の『まがのひれ』が宣長の手に届けられたことであろう。なお、「本居春庭写物覚帳一」（全集別巻二、p.538）安永九年九月の条に「一、末賀の比礼」とあり、宣長が春庭に本書の書写を命じたことが知られる。
- 中旬 内山真竜名古屋に道磨を訪う。別れに臨み、道磨「別」「賀」「田」の題で各二首を詠み贈る。（問答十三、参照）
- 十一月下旬 真竜、栗田真菅を伴いて、道磨を訪う。鳥

居海人彦の家で榛木社中の在雄, 本丸等と交歓した。道麿, 未見の土満に長歌を託す。

廿二日 宣長, 鶴鳴の『まがのひれ』に対する反駁の書『葛花』の稿を脱す。〔自筆稿本の末に, 「かくて安永九年の霜月の廿二日の夜, ともし火の下にてかきをへつ, 本居宣長」と識す。〕

下旬 「問答十三」。本冊中に, 「〇新こく古今¹³⁾抄出, 御加筆被下, あきらけく相成忝奉存候, 蒼生は, 羽倉藤蔵とやら, 藤之進とやらの妹にて, 浅草に住て, 常に御はたもと其外の娘子たち, おく方へ, 歌道指南しありく人のよし, 真菅より申候,」と報じている。また, 「先々月, 真竜来られし時によみし道丸歌, 御添削奉願候,」と述べ, その時の詠歌を記しており, 宣長それに加筆す。

十二月下旬 「問答十四」。本冊中に, 「此月の十日の夜の暁がたに, 道丸夢見つ, 云々」とて, 夢中に告げを得た説を報じて, 宣長の判断を乞うている。研学に専念している道麿の日常を彷彿せしめる話柄と言うべきであろう。

〇天明元年辛丑 (1781), 五十八歳。

正月 「問答十五」。万葉諸巻にわたる疑問であり, 大阪の高庄二郎の名あり。

二月朔日 真竜宛道麿書簡。本書簡の内容について。榛木社中の有尾, うづを, あゆ丸等が秋葉参詣につき託す。有尾, 真竜筆の真測像を切望す(「右ら人々の内有尾ハ, かの鳥井に而〔稿者注一安永九年十一月月中旬参照〕御逢被成候人, 云々」とあり)。土丸, 真菅兩人によるしく。

三月十八日 道麿宛宣長書簡(『本居宣長翁書簡集』所収)。内容は, かけろふ七八返戻受取, 竹取さらしなの事「疑問」にて答えた如し, くすひ¹⁴⁾のこと, 浜松中納言物語四巻写し了, 尾張家中河村七郎のこと等。その他, 真測書状三通を授与すと。

十九日 宣長, 尚賢より『まがのひれ』返戻さる。(尚賢宛宣長書簡)。

四月廿九日 南川維遷宛宣長書簡の中で, 市川多門と『まがのひれ』, それを駁した『葛花』, について報じている。

※道麿の著述中最も高い評価を得た『撰集万葉徴』上中下三巻成稿す。奥書に「天明元年辛丑四月 田中道麿述」とある。〔活字本, 尾山篤二郎・赤木邦輔校訂『撰集万葉徴』(万

葉学叢書第二編) 大正十五年八月十五日, 紅玉堂書店。なお, 本書口絵写真一葉は道麿自筆稿本の面影を伝えて貴重である。〕なお, 「本居春庭写物覚帳二」(全集別巻二, p. 539)の天明元年の条に, 本書上中下三冊書写の記録がある。

閏五月十四日 真竜, 名古屋に道麿を訪い, 「別道まろ主とて」と題して長歌を詠んでいることが知られる。(小山正著『内山真竜の研究』p. 278-9。ならびに同書「年表」参照。)

六月下旬 「問答十六」。本冊中に, 「去年春参りし時, 詞ノ玉ノ緒の御草に, 云々」とある。また宣長が「〇古事記伝ハ御写シ候ニ, 忘レタマヘリヤ, 凡テ御問ノ中ニ, 古事記伝ニクハシク云ル事ヲ問タマヘル処々アリ, クリカヘシ見玉フヘキ也,」と注意している所もある。

七月八日 道麿宛宣長書簡。内容は, 久しく道麿より便りなく心配していたがこの程書信を得て安心した, 卅巻のうつは物語の巻序をぜひ定めてほしい, 真竜松坂来訪の折の宣長の長歌一首等であるが, 興味をひくのは『葛花』に関するものである。

※「葛花延引之義, 委細御断之趣承知仕候, 扱此くす花の義, 市川氏も見られ候よし, 評議ハいかゞ候哉, 市川氏料簡承度, 何卒再難も出来申候ハハ拜見仕度候, 此義御序ニ御物語可被下候, 且又貴君ノ思召ハいかゞ候哉, 無御遠慮御評承度候処, 一向何共不被仰聞候ハ不本意也,」とあり, 公平で厳正な宣長の学者的態度と, その蔭に想像せられる道麿の困惑ぶりを窺わしある文章である。

七月下旬 「問答十七」。本冊中に, 「〇うつは物語は巻順しれず, 此後心つけてよとのらす, 愚社中にも是を所持せる人なきから, 驚キて一部書林より取よせて, 云々」とあるに對して, 宣長は, 「己レ年来ノ願望也, ナニトゾ考ヘ玉ヘ, イク遍モヨメバ他ノ徳ヲモ得ル事多シ,」と述べている。

九月廿三日 道麿宣長宛出状(ただし, 本書簡はなし)。〔十二月九日付道麿宛宣長書簡の始に, 「九月二十三日, 十月十三日二度ノ御書状, 追々相届拜見仕候,」とある。〕

下旬 道麿上京, 京都小西某に会う。〔十二月九日付書簡記事。〕

十月十三日 道麿宣長宛出状(ただし, 本書簡はなし, 九月廿三日の項参照)。

晦日 道麿社中歌会を開き, 真測十三回忌靈祭を行

う。〔真竜宛道曆書簡二五、天明二年正月下旬付宣長宛道曆書簡、参照。〕

十一月三日 真竜、名古屋に道曆を訪れ、出雲風土記を会読す。(『内山真竜の研究』p. 690)。

十二月九日 道曆宛宣長書簡(『本居宣長翁書簡集』所収。『稿本全集一』は順序を誤る)。内容は、十月十一月風病流行し宣長学事を廃す、うつほ物語校合のこと、医学高名の浅井翁のこと、宮地春樹のこと等である。重要と思われるのは『万葉徴』と真淵追慕の会のことであろう。前者については、「一、万葉徴、上ト下ト二巻返上申候、三冊共写取申候、中ノ巻ハ蓬菜只今写サレ候、是モ三冊共写被申候而、殊外賞美也、」とあり、後者は『手向草』の成立と関係する。

廿一日 尚賢宛宣長書簡。同書簡中に、「一、尾張田中生より参申候書状御届申上候、且又右なご屋社中の詠も入御覽置候様ニ申参候故差上申候、云々」とある。

※この年海量の『ひとよ花』に跋を寄す。〔日本名著全集第廿四巻『和文和歌集上』p. 501参照〕。

○天明二年壬寅(1781)、五十九歳。

正月十六日 宣長『手向草』の序を草す。「(天明二年む月の十六日 もとをりの宣長」と識す)。

下旬 宣長宛道曆書簡(『蔵書目録(四)』p. 128—p. 131)。内容は、うつほ物語の巻順に関して、今本・浅井本・陽姫君本を一覧表にしたものと、道曆社中の人々の紹介であり、いずれも重要なものである。他に真淵十三回忌の歌に関するものがある。

二月上旬 「問答十八」。本冊中、「てにをは」について、宣長の具体例を挙げての明快な説明が見られる。

十五日 真竜、名古屋に道曆を訪う。

四月十七日 道曆、直磨と正雄を伴い松坂に在り、この日遍照寺歌会に出席、歌よむ。(『遍照寺月次歌集第五帖』参照)。

五月中旬 「問答十九」。本冊中に、前月の道曆の松坂行を示唆する文あり、また津金文左衛門の名あり。

下旬 真竜宛道曆書簡。本書簡冒頭に、「卯月の中頃松坂に参りけるに、本居のうしのくさくさめづらしきをしへどもありしを書付て、遠江の真竜主、真菅主、土満ぬしに奉る、」と記

して、松坂で得た新知見(注釈)の幾つかを報じている。

廿八日 道曆門人植松有信『玉の小琴』を書写す。(『本居宣長の万葉学』p. 55参照)。

六月十五日 道曆、下ノ一色の太郎兵衛某を訪れ一宿。「問答二十」の記事)。

七月上旬 「問答二十」。本冊中に、「〇万七(貴本)ノ十二オ、志長鳥云々、頭書に、初句別に今案ありとの玉ふを、御説しめし玉はね、」と問うたのに対して、宣長は、「此頭書モ宣長考ニアラス、他人ノ書入ヲソノマ、愚本ヘハ書オキシ也、カクノ如キマギラハンキ事トモ多キ故ニ、愚本御目ニカクル事ヲ憚リシ也、書入コトゴトク己ガ説ニハアラス、」と答えている。この時、既に宣長書入本万葉集巻七を道曆が借覧していた事実を示すものである。

※「問答二十一」。本冊は標題を欠き、客観的には年次不明であるが、内証により天明二年と推定せられている。この推定は正しいと思う。因みに、本文中の「去々年」は安永九年と考えるのを妥当とする。

九月十七日 道曆宣長宛出状(ただし、本書簡はない)。「十月八日付宣長書簡に、「九月十七日、同廿四日両度之御状、追々相届致拜見候、」とある。」

廿四日 道曆宣長宛出状(ただし、本書簡は存しない。前項参照)。

十月八日 道曆宛宣長書簡(『本居宣長翁書簡集』所収)。内容は、うつほ物語校合分四冊返戻、三冊残、字鏡参考、日本後記二冊、擬集古録、清水大亮への書状等についてである。注意すべきは、

※「一、秋中御故郷へ御出被成候よし、」とあり、この年の秋道曆美濃に帰りしこと。

※「一、活用言ノ冊子、所々御書添被下、悉存候、猶追々奉頼候、くはしく別紙ニ申せり。」とあるは、いわゆる『御国詞活用抄』の問題として、国語学史上に論議のやかましい、その原点をなすものである。

※「一、万葉八、九、十、三冊、慥ニ受取申候、此度十一、二、三ト三冊、入御覧候、」とあり、質疑に代えて書入本を借覧せしめていたことが分る。

※「一、東語葉、扱々宜キ思召付ニ御座候、是ニ而大ニ分リヤスク、甚大慶也、此方へも写取申候、今シバラク御かし可被下候、此格ニシテ万葉一部ノ言ヲモ集メタキモノ也、」とある。恐らく、草稿成り、宣長の披閱に供し

たのであろう。さすれば『東語葉』の成稿は、天明二年秋既成としてよいか。〔『稿本双書第一巻』所収。〕なお、「本居春庭写物覚帳二」(全集別巻二, p. 549)の天明二年の条に、「万葉東語葉」とある。

○天明三年癸卯 (1783), 六十歳。

正月 『石上稿』によれば、宣長「田中道万呂六十賀に」とて、正月下旬か二月上旬に出詠。

二月 道磨六十賀会を行う。〔『内山真竜の研究』p. 279, には、「天明三年二月道まる主六十賀を尾張国桜の町にてしける時、屏風の画を人々にもよませけるに、桜のもとに人立ち、春よかく桜がもとにいく年もめでし心は老ぞ知らむ、と出詠してゐる。」とある。〕

三月十五日 前項につき、同書「年表」(p. 691) には、「一、三月十五日、名古屋田中道麻呂六十賀に出詠。云々」とある。

※この頃、恐らくは六十賀を契機としてか、道磨剃髪して名を道全と改む。『石上稿』三月末の所に「田中道まろかしらおろしぬと聞てよみてやる」と題して一首を録す。

四月廿九日 道磨宣長宛出状 (ただし、本書簡なし)。〔五月十日付書簡に、「去月廿九日之御状相届、云々」とある。〕

五月十日 道磨宛宣長書簡 (拙稿「田中道磨の松坂訪問」所収)。内容は、万葉二巻受領、一・二・三の三巻借す、うつほ物語校合本、海量著作への序文、正雄依頼の短冊のこと、六十賀の歌などのことである。なお、「一、詞玉緒板行、やうやうとかゝり申候由、申越候、」とある。

六月二日 真竜、道磨を訪う。同三日宝誠院歌会に出席す。〔『内山真竜の研究』p. 279〕

中旬 土満大平と共に名古屋に道磨を問う。(中村幸彦氏「道磨と土満」一賢愚同袋四一参照)

八月廿八日 鈴木梁満宛道磨書簡 (『近世文学展』所収の写真による)。この写真によれば、宣長の『葛花』『直毘霊』、鶴鳴の『まがのひれ』などが、道磨社中で貸借・書写されている状況が窺われる。

九月三日 此日より翌十月四日まで、道磨は木田、津島、高田、飯木等へ出かけていたことが、十月中旬付の書簡によって判明する。

※この留守に、宣長から書状のあったことが、「ルスに松坂より書状来りをり、云々」によって分る。

十月中旬 柏瀧宛道磨書簡 (『榛木翁書簡五種』¹⁵⁾第二, 所収)。前項の如く、道磨の具体的な生活の一面を伝えている点で、興味深い内容を有っている。

○天明四年甲辰 (1784), 六十一歳。

正月十九日 真竜、山下政定と高林方朗を伴い、道磨を訪う。〔『内山真竜の研究』p. 279〕

※『石上稿』正月末の箇所に、「をはり人大館信瀬は田中道麻呂にしたかひて此ころ物ならふ人も歌こひければよみてあたふ」と題し、一首を録す。〔『鈴屋集四』には、大館高門として録す。〕

二月一日 真竜、伊勢よりの帰途道磨を訪う。(前項正月十九日が往路の訪問ということである。)

二月十三日 道磨病む。〔本年四月と推定される道磨書簡に、「もとより去去月十三日より、当地の内あるき不申、愚宅にてのよみ物もなく、只々療治一件に相かゝり居申候仕合、云々」とある。〕

三月十二日 道磨、真竜に真淵歌集の筆写を頼み用紙を送る。真竜直ちに筆写して遣す。〔『内山真竜の研究』p. 280〕

十四日 道磨宣長宛出状 (四月十八日付書簡の記事による。本書簡はなし)。

春 道磨、『御冥加普請の記并図』に跋を草す。本書の刊行は奥付によれば、「寛政四年壬子夏四月」である。なお、この文章は「道全集」にも載せている。

春 『万葉集類句歌鈔』稿成る。〔『万葉集事典』(佐々木信綱編)によれば、「天明四年辰春」と記す。〕

春 『万葉名所歌抄』執筆す。宣長の「田中道麻呂万葉名所歌抄序 (鈴屋集六)」によれば、「名所歌抄はしも、ことにやみふせりしほどまで、心をいれて、床のべさけず、かしらもたげつゝ物したりしを、えたへずて、なからばかりにも及はず、かきさしつるはしも、殊にあはれる後の世の形見なるべき物にしあればと、云々」とある。孤老病苦の中で傾注した執念は、文字通り“万葉の鬼”の相貌を窺わしめるに足るものがある。

四月五日 真竜、道磨宛に、新撰字鏡、国意考、さらしな日記、歌会式等を送出している。〔『内山真竜の研究』p. 280〕

十日 道磨宣長宛出状 (四月十八日付書簡の記事に

よる。本書簡はなし)。

- 十八日 道麿宛宣長書簡 (『本居宣長翁書簡集』所収)。内容は、道麿口中の痛みに苦しむ、小篠敏松坂逗留万葉を学ぶ、『手向草』板行につき、板下出来次第一見したき等のこと。なお冒頭に、「三月十四日、本月十日之御状次々相届、致拝見候、」とある。
- 六月十八日 七月二日付書簡に、「去月十八日之御状相届拝見候、」とあり、直麿・正雄等が、道麿の病状を宣長に報じていることが分る。
- 七月二日 直麿・正雄宛宣長書簡 (『本居宣長翁書簡集』所収)。内容は、専ら道麿の病状についてである。
- 廿日 真竜、病床に道麿を見舞う。(『内山真竜の研究』p. 280)
- 八月四日 前掲書「年表」には、「一、八月四日道万呂より飛脚薬物を乞ふ」(p. 694)とある。
- 十五日 柏淵有香宛道麿書簡 (『万葉集関係書簡集』)、『万葉集事典』(p. 779)の解説によれば、「この年八月二十八日は、大伴家持の一千年忌に当るを以て、美濃の養老寺にて年祭を行ふことを、病中依頼せるもの。」とある。
- 十八日 道麿宛宣長書簡 (『本居宣長翁書簡集』所収)。内容は、『手向草』板下についての意見と病氣見舞とである。
- 十月四日 道麿死去。酉刻とも、戌刻とも、と。
- 廿三日 宣長、道麿の死を悼んで、「告田中道麿之靈詞」¹⁶⁾を捧ぐ。

注

- 1) 「道全集」には次の如く載せている。
 武加志奴昆
 天津神代乃昔志奴倍流人等都村比呂古風俗乃宇多志
 奴備世牟登毎月円居四都々乎里加良乃花尔鳥二見流
 物聞物遠末久良五登々志天作出鶴歌等乎書志流之天
 曾我婦美乃名乎武加之奴昆登名豆久流尔奈毛
 安永六年酉二月九日 田中道麿
 本文には片仮名が振ってあるが、印刷上の都合で以下

に示すことにする。私に読点を付した。

- アマツカミヨノ、ムカシンスベルヒトラ、ツドヒテ、
 イニシヘフリノ、ウタシスヒセムト、ツキゴトニマ
 トキシツ、ヲリカラノ、ハナニトリニ、ミルモノ
 キクモノヲ、マクラゴト、シテ、ヨミイデツルウタ
 ララ、カキシルシテゾ、アガフミノナラ、ムカシヌ
 ビ、トナヅクルニナモ、
- 2) 「道全集」は大平に披閱を請うたので、かかる注記が存するのである。「暮雨」が暁台であること言うまでもない。
- 3) 楯取魚彦を利かせてあるか。魚彦と道麿は旧知。
- 4) 宣長と道麿との学的交渉の意義については、拙稿「田中道麿の松坂訪問—宣長と道麿—」(『文莫』第三号)で、若干の考察を試みた。
- 5) 道全集安永七年の十月以後のところに、中養父を悼む歌二首を録す。或いは道麿や、時を経て師の死を知れるか。
- 6) この「下」は、全集十四に所収す。
- 7) これについては、拙稿(注4)で考証を試みた。
- 8) この道麿宣長問答の説は、ほぼそのまま刊本の「古事記伝十一之巻」(全集九、p. 471)に採用せられている。
- 9) 「鈴屋答問録」に採られているのは、「がり」「春べの二項のみである。
- 10) 記伝六之巻には、「不速来(トクキマサズテ)、此ノ受互(ズテ)は、悔(クヤ)む意ある辞なり、」とす。(全集九、p. 240)
- 11) これを植松有信ではないとする意見もあるが、従い得ない。
- 12) 「紫文要領」のこと。今日一般には「ヨウリヨウ」と読むが、果して然るか。
- 13) 本書につき、中西慶爾氏著「稿本田中道麿伝」には、「『新刻古今疑問』は歌学に関する問答書。天理図書館に自筆本があり、栗田土満筆写本が『栗田土満雑集』の中にみられる。」(p. 86)とある。
- 14) 不明。
- 15) 「文莫」第三号、(昭和53年7月、鈴木朗学会発行)所収。
- 16) 「鈴屋集六」所収。